

idea

ニュースレター「アイデア」

2024. 1

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | 日本舞踊家 皆川かおりさん
- 3 | 団体紹介 | 浜民伊勢神楽保存会
- 5 | 地域紹介 | 中日向自治会(千厩)
- 7 | 企業紹介 | 株式会社サクシーディング(川崎)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴④ 実績を残したいのか、名を残したいのか
- 9 | センターの自由研究 | 暮らし調査ファイルNo.23「火のある暮らし」

今月の表紙

蒸かし釜が載った竈。室根町矢越にある茅葺屋根の古民家にお邪魔した時のひとコマです。竈の語源は「釜を載せる所(釜所=かまどころ)」。この日は自家栽培の餅米を蒸かしてくださり、杵と臼でついた美味しいお餅をいただきました。この竈は震災後に新調したのですが、竈のある暮らしは古来から続いています。(自由研究)

idea

発行 いちのせき市民活動センター
せんまやサテライト 〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415
〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel 0191-48-3735 Fax 0191-48-3736
ホームページ: https://www.center-i.org/ メール: center-i@tempo.on.ne.jp

お知らせ

情報

「一関市民の新しい踊り(仮称)振り付け動画公開中」

本誌「二言三言」で対談した皆川かおりさんが振り付けを行った「一関市民の新しい踊り(仮称)」の振り付けを学ぶことができる動画が公開されています。模範演技だけでなく、各振り付けのイメージや所作のポイント、動作を軽くしたり、着席で行う踊り方など、講座形式の動画になっています。YouTubeから「一関市民の新しい踊り」で検索するか、右のQRコードからご覧いただけます。



動画タイトル:「一関市民の新しい踊り～振り付け講座～」
問合せ:0191-23-3434 (一関商工会議所)

イベント

いわいの里ガイドの会「語り部の会」

観光客などに当地域の自然・風土や歴史・文化等を紹介し、当地域への理解や愛着を深めてもらうことを目的に活動している「いわいの里ガイドの会」では、下記日程で「語り部の会」を開催します(入場無料)。当会の語り部たちが一関地方に伝わる民話や伝説を、地元の「素朴な語り口」で語ります。詳しくは下記まで。

日時:2024年2月17日(土) 10時30分開演
場所:旧沼田家武家住宅 (一関市田村町2-18)
問合せ:0191-48-5888 (いわいの里ガイドの会事務所) 0191-21-8188 (旧沼田家武家住宅)

会員募集

「いわい美術振興協会」会員募集

「美術の盛んな地域づくりにふさわしい振興事業、人材育成に寄与すること」を目的に活動する「いわい美術振興会」では、随時会員を募集しています。年齢、性別、居住地、経験の有無は不問で、美術に興味・関心があれば、誰でも入会可能です。詳しくは下記まで。

主な活動:5つの事業委員会で活動
①会報編集委員会(会報の発行)
②美術展企画委員会(美術展の開催)
③美術館見学企画委員会(美術館巡り)
④研修企画委員会(デッサン会等)
⑤美術館を考える会(一関に美術館を)
その他、文化事業への参加や支援等
会費:3,000円/年
問合せ:0191-23-1366 (事務局・石川)

情報

「gallery S and N」4月以降の個展等開催申し込み受付開始

花泉町にあるギャラリー「S and N」では、石蔵を利活用したギャラリーを、アート作品等の展示、販売を行いたい作家に貸し出しています(3,000円~/日)。下記内容で4月以降の個展等開催申し込みを受け付けます(作品を見ての判断)。詳しくは下記まで。

貸し出し条件:アートおよびクラフトその他作品の展示、販売/原則連続する2日間~貸し出し可/販売手数料なし/等
利用時間:10時~16時(原則) ※原則土・日・祝日のみ
場所:ギャラリーとクラフトの店 S and N(エス アンド エヌ) (一関市花泉町花泉字地平46-1) ※土・日曜日 11時30分~16時の営業
Instagram:@gallery_sandn
問合せ:070-8933-6552(ナカジマ) ※Instagramからの問合せ(DM)を推奨

情報

「一関じもつと基金」第2回共感寄付エントリー受付中

「地域のために何かやりたい人」とそれを応援したい人」を結び付け、「寄付により市民活動に参加する」という意識醸成を目指している「一関じもつと基金」。

「第2回共感寄付」のエントリー団体を下記日程で募集しています。なお、「第1回共感寄付」には7団体がエントリーし、137人の方から733,821円の寄付をいただきました。各団体への寄付額はHPにて公表しています。



募集期間:2024年1月1日~3月10日
内容:「第2回共感寄付」エントリー団体 ※寄付受付は4月下旬より約半年間
問合せ:0191-26-6400(「一関じもつと基金」事務局(いちのせき市民活動センター))

講座

「市民活動の始め方・閉じ方講座」

新たに市民活動を始める際の「市民活動に関する基本的な考え方(団体の目的、事業の可視化等)」と、団体活動の継続困難に直面した際の「解散に関する一連の流れ(解散総会に至るまで、残余財産の取り扱い等)」について、同時に学びます。講座後は個別相談も承ります。詳しくは下記まで。

日時:2024年2月10日(土) 9時~12時30分
会場:なのはなプラザ4F 共同会議室
定員:10名(参加無料)
申込:2024年2月5日(月)まで、電話やHP内専用フォームから申込。右のQRコードから可。
問合せ:0191-26-6400 (いちのせき市民活動センター)

まちの写真展 スタッフがまちの1コマを切り取ります。

作品名 「ワンちゃんだって、映えたい時代」



一関市千厩市民センター駐車場にあるフオトスポット。ベンチの横にある小さなピンクのドアは「愛犬用!千厩地区まちづくり協議会による「ひまわりプロジェクト」で使用したものを移設しました。同プロジェクトで油したひまわり油は3月から販売予定です。



旧町村別の人口動態等を共有します。

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	53965	-12	24596	46
花泉	11864	-28	4695	0
川崎	3208	-5	1270	-5
千厩	9730	-23	4087	0
大東	11771	-27	4895	-4
東山	5822	-7	2274	3
室根	4354	1	1801	5
藤沢	7013	-7	2774	8
一関市全体	107727	-108	46392	53
出生数	25	-18		

2023年12月1日付 (2023年11月30日現在 住民基本台帳より) ※外国人登録者含む

176 / 107,727

皆川 かおり

「水木流東京水木会」の師範であり、日本舞踊教室・着物体験を行う「和しぐさ」代表。日本舞踊家としての名前は水木都亜歌。祖母の勧めで幼少期から日本舞踊を習い、「第74回全国舞踊コンクール」では、第1位とともに文部科学大臣賞を受賞。外国人向け日本舞踊体験教室も行っている。大東町鳥海生まれ(在住)。



令和5年の「一関夏まつり」で披露した時の様子。中央前列先頭が皆川さん。

第113回

日本舞踊家 皆川かおり

いちのせき市民活動センター センター長 小野寺 浩樹

「参加する楽しさ」を全ての祭りに ～みんなで育て、演出する「新しい踊り」～

平成31年4月に結成された「一関の新しい踊りを創作する会」^{※1}。一関市の合併から10年を迎えるのを前に、「市全体で統一された踊り」を創作し、令和2年夏の「お披露目」を目指していました。しかし、コロナ禍で約2年間作業が中断……。4年越しとなる令和5年夏、ついに誕生した「一関市民の新しい踊り(仮称)^{※2}」ですが、その創作の裏側には、様々な葛藤や苦勞、想いが詰まっています。

小野寺 ついに新しい踊りが完成しました。皆川さんは振り付けを担当されたということですが、どれくらいの間でカタチになったんでしょうか？

皆川 令和4年の4月に「令和5年の夏まつりに向けて準備したい」とお話があり、そこから手探りで進めてきました。実は令和2年の1月にも打診があったんですが、予算の関係やコロナ禍に入ってしまったことで白紙になり、再び声をかけてもらったという流れです。

小野寺 実は我々も関わっていて、令和元年6月から12月にかけて開催された「一関の新しい踊りを創作する会」主催のワークショップを担当しました。なので我々が整理した「新しい踊り」のアイデアを皆川さんが具現化したという関係なんです。

皆川 そうだったんですね！確かにワークショップで出されたアイデアを渡され、「これら

の意見を参考にしてください」というオファーでした。

小野寺 我々が担当したワークショップは、一関・千厩・大東の3会場で各3回ずつ開催し、約90人の参加者でした。日本舞踊等の先生方も多かったです。が、我々は踊りの知識がなく、流派なども分からないので、言葉選びなど、慎重に向き合った記憶があります(笑)

皆川 私はワークショップには参加していませんでしたが、踊りの先生方もたくさん関わっていらつしやると伺ったので、流派は関係なくなるよう、皆川の名で引き受けさせていただきました。

小野寺 確かに、ワークショップの中でも「誰が振り付けをするのか」を気にする声はいくつかありました。「違う流派の方が振り付けると踊りにくい」とか。本名で引き受けるといこうとでカバーされたんですね。

ちなみに我々が整理したのは、曲のテンポや踊りの構成、所作、歌詞や楽器の有無、掛け声、隊列などであり、具体的な振り付けに関わるアイデアではなかったのですが、振り付けはどのように考えていったんですか？

皆川 まずは旧町村に関係するキーワードを振りとして入れようと思ったんです。でも、繰り返して構成される踊りじゃないと覚えられないとも思ったので、平等に全町村分入れられないのなら一切地域をイメージするものはやめようと。それで、一見「ん？どうやったの？わかんないな」っていう踊りの方が楽しいかなと思う、「踊って見たらわかる」という感じの振りにしていったんです。

小野寺 確かに、簡単には真似できない所作が多いですよ。

皆川 試行錯誤を重ねる中で、私の体がフリーになる、自由に気持ちよく踊れる振りってなんだろうといういろいろ組み合わせていきながら、「これって太陽が昇るようなイメージだな」とか動きにメッセージ性をつけていったんです。

小野寺 一つ一つの振りに意味があるということをお分かって踊ると、ただただ踊るのとは熱の入り方が違うだろうし、そこまで伝えていきたいですね。

皆川 令和5年6月末から各地で練習会が開催されたんですが、全会場で講師を担当し、その中では意味が全部伝えられたので、練習会があつて良かったと思います。イメージしながら踊ると、その人の内から出るものが変わってくるんですよ。より楽しく踊ってもらえるかと。

小野寺 令和5年は各地の夏まつりで踊ったんですね。皆川さんの地元・大東地域は町としての夏まつりがありませんが、何の機会に踊ったんですか？

皆川 私、商工会議所青年部にも所属しているので、興田で昔やっていた仮装盆踊り大会を、大東町の新たなお祭りにできた良いなと思う、既存イベント内の一企画として提案したんです。今回の新しい踊りのほかに、大東音頭、マツケンサンバ、マイマイム、ゲゲゲの鬼太郎の曲を使った踊りも作り、5曲を踊る機会にしました。小さい子

たちも一緒に踊ってくれて、すごく楽しくて。

小野寺 この踊りを機に夏まつりの在り方を見直すというのは、ワークショップの中でもやりました。それぞれの夏まつりはあつちつ、一つの「共通の楽しみ」として今回の踊りができたわけで、今後どう発展していくのかは楽しみです。

皆川 今回の一関の夏まつりでは、ランドフィナーレとして、各地域の音頭を各団体が踊った後、全員で新しい踊りを踊ったんです。一関の夏まつりって、他地域からは参加できないイメージがあつたので、「あ、参加して良いんだ」と思えて、すごく良かったです。

小野寺 旧町村レベルの踊りは残し伝えつつ、「市民みんなが踊れる踊り」になるわけですか。逆に千厩の夏まつりに、旧一関の踊りチームが参加しても良いわけ。ちなみに、今年「踊り」にだけ注力した状態ですが、隊列や衣装、楽器などはどう考えれば良いでしょうか。

皆川 今はあくまでも「踊り」

と「曲」でしかなくて、ここに参加者のみなさんが「演出」として楽器や隊列、衣装を加えていくのであり、総合的な「素敵さ」はそこから生まれてくるのだと思います。

小野寺 盛岡さんさも、笛、太鼓、チーム内で役割があつて、その一体感やチーム感を楽しむものだと思うので、自治会などでも取り組んでもらい、踊りを通してコミュニケーションが生まれると良いと思います。

皆川 人口減少で存続が危ぶまれるお祭りもありますが、そこに参加していた人たちは、「そこがなくなったら終わり」ではなく、もう少し大きい受け皿があればな、と思うんです。例えば盛岡さんさは、最終集団が個人参加OKになっていて、誰でも踊りに参加できるんです。そんな仕組みも良いな、と。

小野寺 それは良いですね！市民に関係する合併後の「共通のもの」って実はほとんどないで、貴重な、新たな一歩です。誰にでも機会がある「参加して楽しいまつり」の一要素に育てていきたいですね。

※3 「一関市民の新しい踊り(仮称)」はYouTubeにて振り付け動画を公開している。本誌裏表紙「おしらせ」に関連情報掲載。
※4 「摺沢・四ツ角元氣市」内で「仮装盆踊り大会」として令和5年8月14日に開催。

※1 一関市及び商工会議所青年部・女性会など市内各団体のメンバーにより構成される「幹事会」と、ワークショップを通して踊りの創作を図る市内8地域から選出された「市の踊りづくり100人会」により構成される会。
※2 今後正式な名称を公募予定。

渋民伊勢神楽保存会

150年以上前から伝わる「渋民伊勢神楽」を地域全体で継承していこうと、全戸を対象として平成13年8月に発足。毎年9月には渋民八幡神社で奉納するほか、地域内の拠点(各自治会館等)や当祝者宅で演舞する「地区巡業」も行う。

TEL 0191-75-2926(会長：佐藤)



左の写真：「一関地方伝承芸能継承交流会」での集合写真(令和5年11月19日)

地域の課題に若手の有志が立ち上がる

令和3年で団体発足20年を迎えた渋民伊勢神楽保存会。その発足経緯は、若手の有志が立ち上げた「讚互会」に遡ります。「讚互会」は、各種イベントなどを通じて大東町渋民地域の振興に取り組みようと、当時の30代〜50代、30人超が昭和55年に立ち上げた団体で、「311讚・511互」の語呂合わせ。「要は交流の場で、飲みにケージョンを通して地域のことを語り合っているうちに」「このままでは地域が衰退してしまう。盛り上げよう!」という機運が高まり発足したもの」と語るのは、同保存会顧問で、讚互会でも中心的存在だった金野鑛太郎さんです。

金野さんは、「讚互会」を発足する数年前、地域に古くから伝承されつつも、その灯が消えかかっている複数の芸能のうち「渋民伊勢神楽」に着目。「笛演奏や舞い手が丈夫なうちに教えてもらおう」と立ち上がり、経験者から

渋民伊勢神楽保存会

渋民伊勢神楽の歴史と継承の変化

口伝で伝授されます。讚互会が発足すると、その年の渋民八幡神社例大祭には渋民伊勢神楽を奉納。約20年ぶりに奉納復活を果たすと、さらに同年、新たな継承活動として、当時の渋民小学校(平成23年閉校)児童に指導を開始したのです。渋民伊勢神楽は、太陽に見立てた大太鼓を、舞い手がアヤ(両端に房を付けたバチ)で祈りをこめて順番に叩き、遠くからでも伊勢神宮を参拝していることを意味する踊り(南部神楽ではない)です。江戸時代、「お伊勢参り」が流行し、各地で「伊勢講」が結成されます。毎年5〜6名が代表として伊勢神宮を参拝し、「お札」と「旅の話(お土産話)」を持ち帰る。「それは、それは、大事な役目だった」と金野さんは言います。

その道中で見た神楽を「伊勢神楽」として渋民地域に伝えた人がいるのではないかと推測されます

が、伊勢神宮に伝わるのは「伊勢大神楽」という獅子舞であり、渋民地域に伝わった伊勢神楽とは別物。「道行芸能」や別の神社の神楽を伝承したという可能性のほか、「伊勢の賑わう現地の様子を身振り手振りで舞って見せた」という説もあるのだとか。

150年程前には、小山文七郎、熊谷松治郎の指導により、今日の原型が渋民地域に定着していたとされますが、指導者不足等(徴兵、出稼ぎ、集団就職の増加など)により、伝承が途絶えかけており、そこに着目したのが金野さんたち若手の有志だったのです。

「讚互会」は20年間、伝承活動や祝宴の席で舞を披露してきましたが、会員の高齢化により平成11年に解散します。その後も元会員らが小学校での指導を継続していましたが、「渋民伊勢神楽を残していけないと、この地域には何もなくなるぞ」という不安から、どうやって継承していくべきか話し合いを重ねることに。「讚互会」の解散には、会員が一部の集落に偏っていた(一関市渋民市民センター近隣の集落を中心としていた)ことから、新しい人や若者を巻き込むことができず、会員が高齢化したという背景があります。そこで、渋民地域全体で次の世代に繋いでいく環境を整えようと、平成13

4年ぶりの「地区巡業」とこれから

年、渋民地域の全戸を対象とする「渋民伊勢神楽保存会」が結成されたのです。初代会長には金野さん、各自治会の区域ごとに幹事2名を置き、若者や子育て世代(PTA)などにも役員に加わってもらうことで、継承の流れを確立させました。

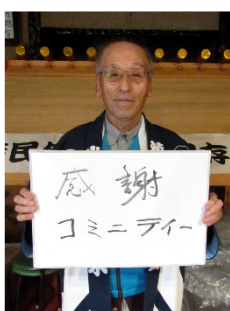
渋民八幡神社への奉納と合わせ、同会では「地区巡業」を行い、お祝いごとのある個人宅等で神楽を舞います。

コロナ禍で巡業を中止(令和2年は大人のみが神社奉納)していましたが、令和5年は復活。「4年ぶりで舞い手が集まるか心配もありましたが、事前練習にも多くの人が集まり、例大祭当日は年長児〜中学生を含めた約30人で地域内の拠点や当祝者宅など17地点で演舞することができました。今の20〜50代の住民は小学校の地域学習として取り組んでいたもので、笛や太鼓のリズムが体に刻まれています。呼びかけで舞い手が集まったことを嬉しく思います」と語るのは現会長の佐藤幸一さん。

「受け継ぐための流れを先輩方が築き上げてくれた賜物。平成26年に伊勢神宮で舞を奉納したときのように、今

Q.あなたにとって「渋民伊勢神楽」とは？

顧問

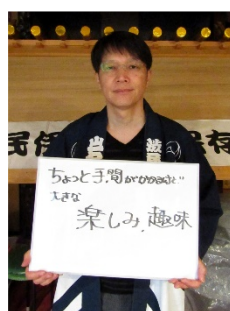


A. 感謝 コミュニティ

このころ 金野 鑛太郎さん

讚互会の解散後、保存会設立の発起人となり、平成13年から平成21年まで同保存会の会長を務めました。現在83歳で、渋民伊勢神楽とは50年近く向き合っています。

会長



A. ちょっと手間がかかるけど 大きな楽しみ 趣味

さとう こういち 佐藤 幸一さん

平成13年から庶務、事務局を歴任し、平成22年から会長に。笛の演者でもあり、今後の活動主体となる青年層の仲間集めに邁進中。

の世代でもう一度、舞を奉納することができれば、さらに活動への機運も高まるのでは。これからも時代に合わせ、会員みんなで継承について考えていきたい」と今後の目標を掲げます。

- Photo gallery -



令和5年は市や大東町のイベントや交流事業にも参加。教育委員会民俗芸能記録保存事業として記録動画も撮影しました。

芸能交流会・発表会



地区文化祭での展示 「地区巡業」で撮影した記念写真等は「渋民地区文化祭」で展示後、当祝者に贈呈しています(写真は令和5年)。



舞い手の必需品「アヤ」は東山和紙で制作しています。舞い方だけでなく、小道具づくりも継承しています。別名「花バチ」。

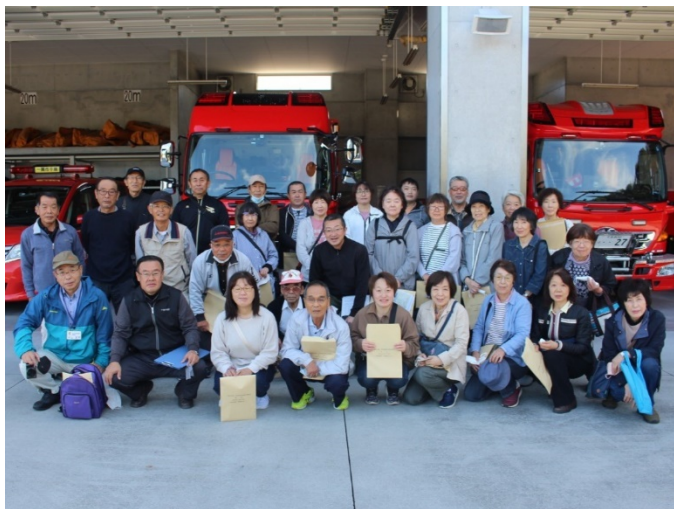
アヤ(綾)づくり



活動の拠点「讚互館」 讚互会会員で建てた会館。若者の活動に感銘を受けた90代(当時)の大工が「最後の仕事に」と棟梁を志願してくれました。

中日向自治会(奥玉)

奥玉宇石ノ御前、熊ノ沢の一部、宿下の一部、中日向の一部、登戸の一部、物見石で構成。一関市奥玉市民センターや千厩警察署奥玉駐在所、ガソリンスタンド等も立地する奥玉地域の中心地(行政区は16区)。世帯数94戸、人口約240人。総務部、農林商工部、福祉厚生部、女性部の4部会制。



左の写真：令和5年度「防災研修」での集合写真

スローガンは「地域の安全は住民自ら守る」

物見石山と愛宕山に挟まれ、急峻な箇所が多い奥玉地域は、令和4年9月に岩手県が新たに公表した「土砂災害が発生するおそれのある箇所」で、急傾斜地の崩壊など、複数箇所が対象とされました。奥玉地域の中心地的存在でありながら、上記対象地に加え、従来からの「土砂災害警戒区域(土石流・地すべり)」「土砂災害特別警戒区域」等が分布するのが「中日向自治会」のエリアです。

「当自治会住民は、先人から脈々と受け継がれてきた『自らの生活は自らが守る』という自主防災意識がとて強い」と語るのは、自治会長の岩淵敏郎さん。同自治会では平成10年2月に「中日向自治会助け合い(防災)総合計画」を策定し、有事の際の伝達命令系統を明確にしています。また、その確認として毎年10月には総務部を中心に防災研修(消防機関と連携した防災訓練等)を実施、毎年50名

中日向自治会

千厩

以上が訓練に参加しています。これまでの訓練は、計画の確認だけでなく、消火訓練や炊き出し訓練、煙体験やAED操作講習、ロープ結び教室、緊急車両の見学など、多岐に渡ります。炊き出し訓練では、女性部、保健推進委員、食生活改善推進員が協力し、白米にもち麦を入れた「もち麦カレー」を提供するなど、食生活の改善についても学んでもらう機会につなげる工夫も。こうした「防災活動を通じた住民相互の助け合い精神、連帯の精神の構築」が、その他活動を円滑に進める要因であると岩淵さんは語り、「先人が残してくれた無形の財産のありがたさを感じる」と続けます。

幼少期から「集まる」ことを「当たり前」に

「環境整備への若年層の参加が近年目立ってきた」という同自治会。各種事業は30代〜70代前半を中心に行われ、60代の多くはかつ

ての自治会青年部、30代の多くは子ども育成会の保護者なのだとか。環境整備は1世帯1名の動員ですが、代替わりをして若者が参加した際には、その作業の始まりなどで「新たな地区の担い手」として参加者に紹介し、初顔合わせの機会にも位置付けます。そうした世代交代が円滑に進む背景には、小学生による「中日向少年消防クラブ(以下、少年消防クラブ)」の存在が。昭和56年、地元消防団の指導で、千厩町(当時)で最も早く発足しました。令和3年3月には「消防庁長官賞」の表彰を受けるなど、自治会内外で認められる存在です。

手の半分は小学生！岩淵さんは「幼い頃から年代の垣根を超え地域活動に触れる機会が創出されることにより、私たちが幼い頃にそうだったように、中日向に生まれ育つ意義を感じ取ってもらえているものと思います」と、「担い手が育っていく要因」を語ります。

核になる事業を大切に、時には取捨選択を

若い世代だけでなく、自治会長等の役職もスムーズに引き継ぎできているという同自治会では、年間の行事や運営委員会(執行部+12人の班長)の開催日なども盛り込んだ年間スケジュールを作成し、関係者全員で共有。事業は主管部が中心となって進めます。

花いっぱいコンクール(花壇整備)や奥玉地域の民芸大会等への参加(スコップ三味線)、手芸教室の開催など、自治会活動の盛り上げ役は女性部。女性部長を経て現在は副会長を担う藤野久美子さんは「集まる機会、場を提供していくことが大切」と、笑顔を見せます。そんな同自治会にも人材確保に関する悩みが。10年程前から、自治会として市から4路線4kmの歩道除雪を受託していますが、定年制の延長で、「60代で自宅にいる人」が少なくなり、除

Q.集落の自慢は何ですか？

自治会長



A. 思いやり

いわぶち としろう
岩淵 敏郎さん

元行政職員で、農林部長時代に自治会役員を外れた以外は、長年自治会の様々な役で活動を支えてきました。副会長を経て令和5年度から自治会長就任。

副会長



A. 声をかけ合い 明るい和

ふじの くみこ
藤野 久美子さん

2期3年目。女性部長を経て副会長へ。スコップ三味線の仕掛け人。住民の声の橋渡し役として、意思疎通がスムーズにできるよう工夫しています。

雪機オペレーター確保が課題に。岩淵さんは「自治会活動を無理なく後世に引き継ぐために、将来の姿を各年齢層とともに検討し、事業の整理もしていきたい」と、「身の丈に合った活動」を目指していきます。

- Photo

gallery -

少年消防クラブ

発足当時は20名を超えた隊員数でしたが現在は8名。少子化の影響を受けつつも、保護者も巻き込みながら活動継続中！



AED操作講習

一関東消防署の職員を自治会館に招き、防災訓練の一環でAEDの操作講習を実施。2班に分かれ実践を行いました。



毎年工夫を凝らして

おにぎりの炊き出し訓練の際は「食の匠」の指導による漬物をセットにする工夫が中日向流。ケチャップライスの年も。



若いパワーで優勝！

奥玉地域の全8自治会が参加し、4種目で競った令和5年度「奥玉地区民ニュースポーツ大会」は同自治会の圧勝でした！



川崎 株式会社サクシーディング

前身は花泉町油島で昭和50年に創業した「(株)東北通信花泉(代表取締役赤堀恵秀さん)」。一関市の工業団地への本社移転を検討していたところ、川崎村(現一関市川崎町)から誘致され、平成4年、本社を移転新設し、株式会社サクシーディングに改名。日立製作所(奥州市水沢/現在閉鎖)の協力工場として、弱電部品の製造を行っていたが、平成7年、異業種・事業転換に関する国の補助事業を活用し「電気機械器具製造業」から金属機械加工業の「精密機械器具製造業」に転換、現在は「生産用機械器具製造業」となる。令和3年、息子の赤堀剛司さんが2代目代表取締役に就任。仙台にも営業所を構える。

「話し合い」の中から生まれる「裏方の部品」たち

「絶えざる創造への活動」を経営理念に掲げる株式会社サクシーディング。社名は「Success(成功)+GO(進行形)」で「常に創造して進んでいく」という意味の造語です。全国各地に取引先がある同社。「多品種小ロットを扱う企業は少なからずあるが、弊社の場合は基本にお客様からの一品一葉(様)図面に対しての製造。作るものは1個ないし2個」と、2代目代表取締役の赤堀剛司さんは同社の特徴を語ります。同社が扱うのはプレス金型のノウハウを駆使した、精度の高い金属加工と設備関係の精密機械の治具加工。当初は、前身企業が昭和50年代から製造していたブラウン管テレビ部品が主力でしたが、液晶テレビの発展で需要が激減。カセットレコーダーのメカやビデオデッキなどの「弱電部品」、パソコン用のモニターも製造・組立していましたが、各種部品製造とともに、製造や組立等に使用するための「ブロック」や、位置決めのための「ブロック」などの「治具」を自社製造していた背景もあり、平成7年から、現在の「治具加工・製造業」へと転換しました。

エレクトロニクス産業の変遷と強みを活かした転換

「平成初頭のエレクトロニクス産業は本当に目まぐるしく変わり、翻弄されましたが、国の補助を利用して『SPFフォーミングマシーン』を自社開発するなど、経営理念のもと私たちが得意とする分野を増強し確立することができました」と振り返る赤堀さん。「他の製造業の『モノ作り』のための『機械の部品作り』をメインにしているのので、『私たちは〇〇を作っています』とさえ、未だに『何の会社?』と聞かれます。マニアックな会社ですよ」と、笑顔で続けます。

※1 金属短材片材の塑性成型に使用する製造・加工機械

創造し進んでいくために欠かせない「話し合い」の場

平成14年には医療用具の製造認証も取得し、自社製品として歯科矯正用の矯正装置(ブラケット)も製造する同社。組立をしていた当時は200名程の従業員がいましたが、現在は機械1台に対し1〜2名、または

機械複数台に1名なので、従業員数は15名で平均年齢30代。積極的に地元の高校生を採用し、技術者として育成しており、「コロナ禍を経て再び学校に向いて説明できる機会が増えてきたのはありがたい」と、引き続き人材確保に意欲を見せます。そんな同社が業務を行う上で最も大切にしていることは、現場の人間同士での「話し合い」。「製品を生み出すための治具」をゼロから製造するという特殊な仕事であり、平均年齢が若い分、経験不足をカバーするために、取引先も巻き込んで「みんなで意見を出し合いながら加工を進めている」のだとか。夏はバーベキュー、秋は芋煮会を行うなど、従業員の交流機会が多いことも、日頃の「話し合い」を円滑にしています。今後について「地元の方を採用することで技術を継承し、新たな創造を生みながら日本全国の製造業を支えていきたい」と力強く語り、縁の下の力持ち企業であり続けます。



- 1 代表取締役赤堀剛司さん。
- 2 真っ赤な本社外観。北上大橋から見た時期には話題にもなった。
- 3 設備の充実でミクロン単位の精度を追求。

DATA
〒029-0201
一関市川崎町門崎字銚子153
TEL 0191-43-3612
FAX 0191-43-3678
HP <http://www.succee.com/>

今月のテーマ

地域運営の落とし穴④
「実績を残したいのか、
名を残したいのか」



博識社の
フクロウ博士

第58話

その事業、誰(何)のためですか？

「憧れるのをやめましょう」

WBC(2023WORLD BASEBALL CLASSIC)の決勝戦前、大谷翔平選手がチームメイトに語りかけたこの名言は、記憶に残っている方も多いでしょう。

憧れてしまったら超えられない。「地域づくり」の現場でも、「事例に学ぶ研修会」は多いですが、個人的に「事例に学ぶ研修会」は好みではありません。それは「憧れ」に近いからです。立派な事例を聴けば聴くほど、それらが身近なものではなく、「自分たちには到底難しい」という結論に至ってしまうこともしばしば。

事例に学ぶのであれば、その事例が生まれるまでの「背景」や「プロセス」を聞き、自分たちの状況や考え方と比較しながら、「**一歩でも前に進むためのエッセンス**」を吸収すべきです。これは、研修会を立案する側も意識しなければいけないことなのですが、なかなか変わらないです。このように、「変わらなければいけないのに変われないもの」って、けっこうありますよね。

人が多かった時代に築き上げた地域の「事業(≒行事)」も、マンネリ化が進み、いざ見直しをしようというときの「評価の基準」が、「実施回数」や「参加人数」だったりしがちです。そもそも人口減少時代と言っているが、評価基準が人が多かった時代と変わらないということには違和感しかありません。人が多かった時代の参加人数を超えることは容易ではないですし、事業回数を維持・増加させることは「負担の上乗せ」になる可能性がある訳で……。 「ニーズが多様化しているから、様々な種類の事業が必要だ」と、良かれと思って事業を増やすこともあるでしょうが、ヒト・モノ・カネ・ジカンの無駄遣いになるリスクも伴います。

「俺たちがやってきたことを廃止するのか」と、先輩世代が声を荒げるような議論を目にすることもあります。そのような議論では、感情論が先に出てしまい、「現状分析」と「未来思考」は二の次にされていることが多いです。これまでの努力は理解した上で、継続が難しいという現実もあるのですが……。

「地域づくり」は、「実績」や「評価」のためにするものではありません。時代によって取り組まなければならない課題やその背景は異なり、**刻一刻と変化する事情に対応し、「いつでも安心して安全に暮らしつづけられる地域」**にしていく。いわば「**メンテナンスの繰り返し**」のようなものが「地域づくり」だと思うのです。そこに「実績」や「評価」が関係してくると、関係性がおかしくなってくると感じています。

人によっては、自分の手柄を誇りたくなります。それも大事です。その人の努力がなければ成しえなかったことだってあるので。でも、それに固執しすぎてしまうと、時代錯誤になることも……。

「**成果**」=「**やった人**」や「**実績**」ではなく、「**地域の暮らしが良くなったか否か**」という視点が重要です。名が残るのは、後世の評価でしかないの、今すべきことではありません。今優先すべきは、**難解化かつ複雑化する課題と向き合い、いかに「地域の暮らし」と「地域らしさ」を後世につないでいくか**です。

「地域づくり」は、具体的な数値化が難しいため、「**ニーズやプロセスに対する評価**」が求められます。そこには、関わる地域住民の「**表現したい努力の積み重ね**」があるからです。実績や評価にこだわるなら、ここです。

周囲から見たら「誰がやったっていいこと」で、誰も気にしていないのです。そこにこだわってしまうと、見直しをしようにも、なかなか進みません。「人となり」を切り離して考える。そうしないと、**関わった人に対する好き嫌いが判断にも影響してしまい、変えられるものも変えられなくなってしまう**のです。

過去に憧れるのではなく、未来に向けて……。

「憧れ」を超えていかなければいけないのではないのでしょうか？



当センターが平成28年から開催し続け、令和5年12月に通算16回目となった「自治会長サミット」。冒頭に「事例発表」はありますが、あくまでも「**話題提供**」としており、情報交換タイムがメイン。いつも自治会運営のヒントが飛び交います。

ミッション 82

暮らし調査 「火のある暮らし」

ファイルNo.23

2023年1月号・2月号の本頁で「炭焼き」について調査した際、木炭を使用する道具が色々あることを知り「木炭が生活必需品だった時代があった!？」という仮説を立てた我々。当地域ではどのような「木炭のある暮らし」をしていたのか、「製炭」ではなく「暮らし」の追加調査を行いました。ところが……! 調査を進めると、生活必需品は「木炭」ではなく「薪(柴木)」であることが判明! 「薪」で「火」を得る「生活のサイクル」とは、いかに……? ※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

循環型生活の基礎!

大正4年に岩手県は木炭生産量全国一位となり、当地域でも盛んに製炭が行われていました。現在、当地域で職業として製炭を行い、協会に加盟するのはわずか1名、家庭用として「炭焼き」をする人も数える程度ですが、昭和初期には市内各所で「炭焼き」が行われていました。かつて「炭焼き」をしていた人たちに話を聞くと、「堀(炭)炬燵」など、家の中でも炭を燃料とする道具を使用していたようなので(現在進行形で使っている人も)、炭は「生活必需品」だと思ひ込み、その「暮らし」を調査することにしました。

いざ調査を始めると「確かに炭を燃料とする道具は使っていたが、必需品は薪や柴木。それらを燃やしてできる『燠(おき)』を炭として使う」という予想外の回答が続出! 炭を購入して使用していたという家はほとんどなかったのです(炭焼きをやめたり、「燠」が発生しない暮らしになってからは購入しているという家庭はあり。町場の人は購入)。炭窯を持つ家や集落でも、木炭は現金収入を得るための貴重な「商品(関東等に出荷)」だったため、家庭で使用するのは、あくまでも商品にならないくず炭だったようです。

も、木炭を燃料とする道具を使用してきていたかと言うと、「囲炉裏」や「竈(カマド)」など、薪を燃料とする道具を同時に使用していたからです。むしろ囲炉裏や竈が先であり、その副産物である「燠(おき)」を有効活用する暮らしが徐々に出来上がっていったことで、木炭を燃料とする道具も発展。製鉄などの産業用だった木炭が、家庭の暮らしにも浸透していったのです(それを燠で代用)。「**囲炉裏**」は様々な意味で暮らしの中心でした。マッチやライターがない時代、「火を新しく生み出すこと」は容易ではないため、**囲炉裏**で「火を保存」しておきます。この火を種火にして竈の火を起したり(薪は山から調達)、**囲炉裏**や竈から出た燠(炭)を火鉢や七輪、行火等に使用、灰は畑の肥料や積雪時の融雪剤にしたり……と、**囲炉裏**は様々な循環の中心にあつたのです。

また、**囲炉裏**は「家族の団欒の場所」でもありました。火鉢や行火が普及するまでは、家で唯一の暖が取れる場所だったため、**囲炉裏**が家族の居場所の中で「手軽な火鉢が買われるようになってから、どこの家でもこれに少しの火を入れて、用の無い人たちはさっさと爐端から離れて行くことになりました。私たちは是

を家の火の分裂と名づけて、非常に大きな世の中の変わり目と見て居るのでありますが(後略)と述べており、**囲炉裏**が担っていた役割を窺い知ることが出来ます。

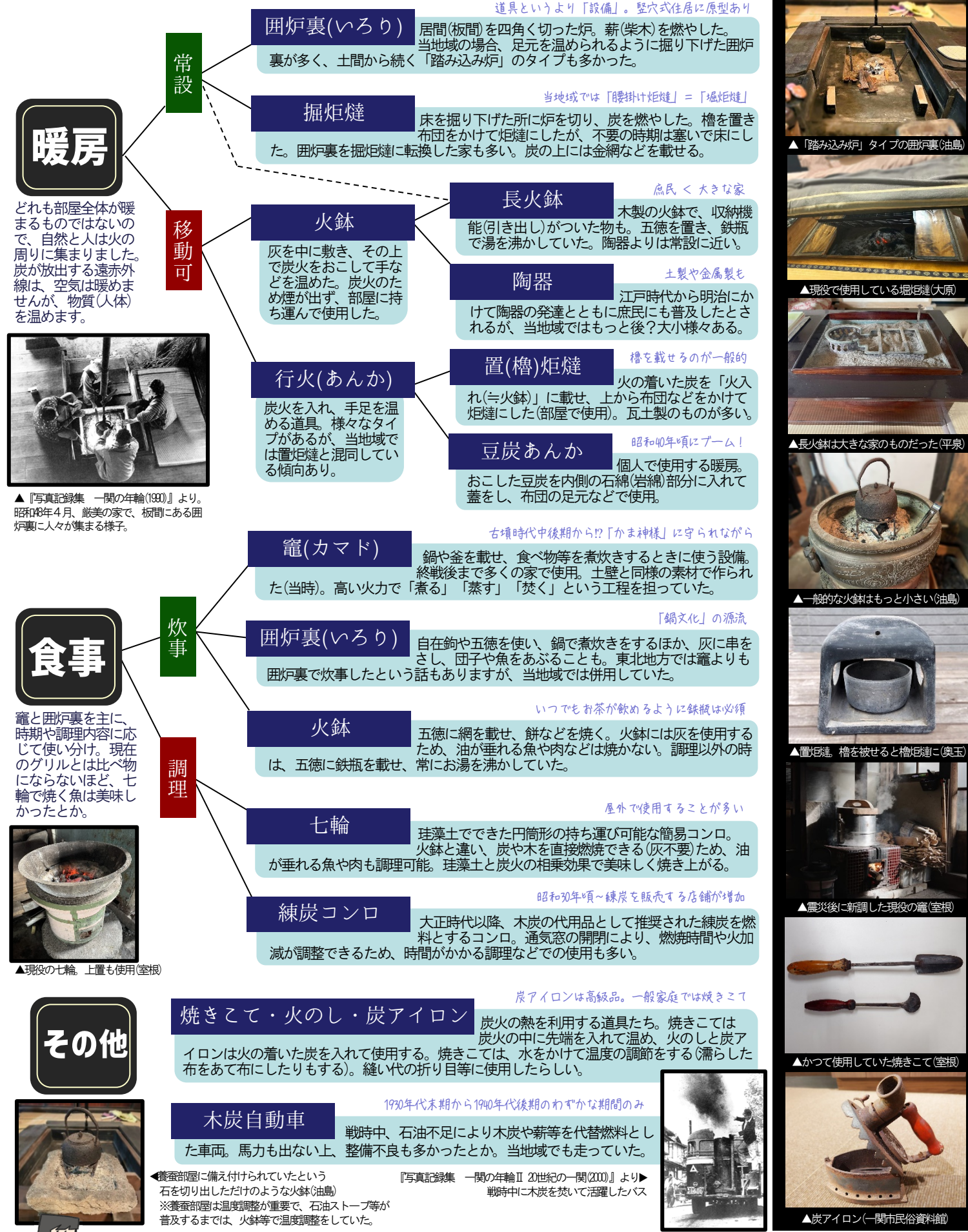
その後、マッチやライターの普及で「火を保存」する必要はなくなり、**豆炭**や**練炭**など新たな燃料の登場や、昭和30年頃からの石油、ガス、電気の普及により、薪も炭も不要な暮らしとなっていくのです。

なお、**亜炭**が豊富に産出された西磐井地域では、木炭に代わり、**亜炭**を燃料としていたという話も複数聞くことができました。

朝(4~6時頃)	日中(8~16時)	夕方~夜	就寝時
① 囲炉裏の燠にかぶせておいた灰を取り除く。 ② 燠を起こす(空気に触れただけで発火することもあるが、小さく砕いて「杉葉」や「硫黄付木」等を使用することもある。 ③ 薪(柴木)をくべ、火力を調整する。 ④ 「十能」等を使って竈等にも火を移し、煮炊きする。	⑤ 火を使用しない間も、火種が消えないように 囲炉裏 に薪(柴木)を補充する。 ※夏場などは⑧のような状態にしておくことも。	⑥ 就寝に備え、 囲炉裏 で部屋を暖める。 ⑦ 行火(豆炭あんか含め)の炭を準備し(着火)、 就寝2時間前 には布団に入れ、布団を温めておく。	⑧ 囲炉裏の燠に灰をかぶせ、炎は消すが、火種としては残しておく (灰の中で燠として火が残る)。 ※寝室での暖は布団に入れた行火のみ。布団の中だけは暖かい。

「火のある暮らし」の道具を整理してみた (当地域版)

石油やガスが普及し始める昭和30年頃まで、多くの家が**囲炉裏**を中心とした「火の循環」で日々の暮らしを営んでいました。限られた資源(薪・炭)を効率的に使用するために、様々な道具が登場(普及)し、当時の人々はその暮らしに応じて、使い分けていたようです。以下では、各種道具の特徴とともに、その使い分けについて、整理してみました。



※1 柳田國男(1944)『火の昔』 / その他参考文献等は当センターHPにてご紹介します。